

もてあそぶ
おに
弄
鬼

女に産まれてこなかった事がさぞ悔やまれる。

何故に、女として産まれてこなかったのか。それ程の素質を持ちながら散々に、そう嘆かれながら育てられた。

女としての仕草や身嗜み、全て女同様に生かされてきたのだ。

それが、ある日告げられる。

“自由に生きて良い”

それは、即ち。これまでの生き方を、全て虚と変える宣告であった。

一族の発祥は、遙か昔、戦国の世まで遡る。

元は神社に所属せず、各地を回る歩き巫女という存在であった。けれど、いつしかそこに戦国武将が介入し、くくの一いち族の分家として育てられ、認められるも、徳川泰平の世を機に、再び本来の歩き巫女として細々と生き長らえる事となる。

それなのに、突如、一族に不穏な予言が舞い降りたのだ。

“間もなく、この世は大きく変貌を遂げるであろう。一族も終焉を迎える。”

と。その予言通りと言うべきか、半年程で黒船が現れた。

一族は代々嫡女が跡を継いできた。故に、嫡男である忍海おうみは跡継ぎから外されたのだ。

“単なる神社という形でもよい。一族が減んでしまう事だけは避けたい。”

かつての主の想いを消してしまう事だけは避けたいというのが、一族一致の意見である。故に、これまでの在り方を変えることになった。

しかし、今までの生活が全くもって変ってしまう訳では無い。

忍海が、一族一人の男として、生きていく道はあった。けれど、彼はそれに自ら背を向けたのだ。一族の女に飼われ、犬のように生きるのであれば、自分の意志で生きてみたいと考えた。

しかし、考えたところで、色や芸で情報を仕入れては売り、時には隙を見て人を始末する術しか教わってこなかった。房中術や生きる術としてしか、身体を重ねる意味を知らない。

世が大きく変貌するのであれば、最早男娼の道しか残されていないのではないかと悩んだ事もあった。で、あれば、女に飼ひ慣らされる筈であった、一族の男が辿る一生と変わりはしないのではないか。

しかし、変貌を遂げる前に訪れるのが変動である。変動が激動へと動き始めるのを感じ取った忍海は、まだ己が己として生きる道が残されているような気がした。妹が単なる巫女一族として継承するのを見届けると、全てに背を向け旅立ちを決めた。

「兄上、やはり行ってしまうのですね」

ここは、犬小屋。飼ひ犬は、飼ひ主が居なければ生きていけないかもしれない。仮にもし、そう諦めた時は、この哀れな犬小屋に戻ろうと決めた。

「さよなら」

全てを決意するまで、五年掛かった。

そして、それから数年。

人を殺しに、殺してきた。

何を食べても鉄の味が混ざるくらい、何処に居ても血の臭いが漂う程に、殺しに殺し続けている。

「巫女の口利き、いたしませぬか」

十九、二十歳程であろうか、料理茶屋の座敷の廊下に、女が頭を下げて座っている。

部屋には、浪士が四人。

今夜は、貸切りの筈である。

女を追い出そうとしながらも、浪士達は実行に移せないでいた。

何故なら、その女が人とは思えない程に、色っぽかったからである。

陶器よろしく白く滑らかな肌に、ほんのり浮かぶ桜色の血の気が雄の本能を刺激する。鮮やかな紫光の黒髪の隙間から、全てを見透かしたかの様な涼しげな視線が、

男達を捉えていた。その視線に、誰もが生唾を呑んで固まっていた。

ようやく、一人の浪士が口を開いた。

「お主、何者だ」

女は、人を喰ったような唇で、静かに答えた。

「お海と申します。^{うみ}歩き巫女にございます。口利きが不要でございましたら、何か芸でもいたしましょうか」

白い着物から覗く首筋に、浪士達はぞくぞくとした。

「今宵は、どのような夜であろうか」

お海と名乗るこの女の唇に、肌にも、誰もが我先に喰らいつきたいと思っていた。

「一曲頼もうか」

お海は、傍らに置いていた三味線に手を掛けた。

「お侍様方、いっぺんには無理でございましょう」

ふふふ、とお海は笑って“魅せ”た。

お海は三味線を構えると、べべんと鳴らした。

「そうですね、お侍様は今宵、地獄に行きますかいね」

お海のパチが、三味線の弦を切った。

同時に、仕込み三味線から抜かれた刃が、優雅に舞う。浪士達は、刀を抜く暇も与えられずに、次々とその場に沈んでいった。

お海は、返り血を避けていただけである。しかし、その姿は、真っ赤な花の中踊り唄う、鬼女の舞のようにしか見えなかったという。

「巫女の口利き、いたして参りました」

と、四半刻程前まで人を斬り刻んでいたとは思えない風貌で、お海は依頼主の前に現れた。

依頼主は、四枚の小判を己の前に置いたままである。

暫くすると別の侍がやって来て、“確かに斬っておりました。今、役人が来て騒

ぎになっております」と報告した。

報告を聞いた依頼主は、四枚の小判をお海の前に寄せた。

お海は、その小判を拾い上げるのだが、その指先までもが実に色っぽい。

その仕草を見ながら、依頼主もまた、それが人に出せる色気では無いと唾を飲んだ。

「人の命は、実に安いものですね。小判一枚だなんて」

お海は、小判を懐にしまった。

「では、私はこれにて」

涼しげな目元で笑いかけるお海に、その場の男達は何も言えずに見惚れていた。お海が宿泊中の旅籠に戻ると、お海の頼み通り、女中はお海を裏口から中へと案内した。その時、先に頼んでいた風呂の用意が出来ている事を告げられる。そして、寢酒まで部屋に運んでくれると言うのだ。

ここまで完璧に用意してくれる旅籠を去るのは実に惜しいが、人を斬ったので明

日には場所を変えようとお海は思う。

お海は早々風呂に入り、血の臭いと共に化粧を洗い落とした。

用意していた寝巻着に替え、忍海の姿で部屋へと戻ると、既に酒と肴が用意されていた。

金を稼いでくれるのは女のお海であるのだが、本来の姿である男の忍海にとっては、いつになつても好きにはなれない姿なのである。忍海に戻れば、やっと解放された気になれる。

既に敷かれた布団の上に腰を下ろすと、月を肴に酒を吞もうと、少しだけ雨戸を開けた。

桜の花卉が風に舞い、眩いまでの月光に照らされながら、ふわふわと夢のよう。指先で弄ぶかのように揺らす酒の中に、桜の花卉が一枚、ひらりと落ちた。

「なんだ？」

と声を掛けると、忍海の艶つばさに心を奪われた女中が、声も出せず部屋の外に

座っていた。傍らには、湯たんぽが一つ。

「今夜も、助かるよ」

女中は顔を真っ赤に染めてはいたが、暗がりですこまでは分からない。女中は湯たんぽを忍海の近くに置くと、おやすみなさいまし。と、そそくさ去っていった。寒いのは苦手だ。湯たんぽの温もりは、至極落ち着く。

忍海は、雨戸を閉めた。

残りの酒は、行燈を頼りに呑んだ。

少し飲み過ぎたのか、いつもより遅くに目が覚めた。

丁度、朝餉を運んで来た女中が、忍海の寝起きに遭遇してしまった。彼女は、忍海の乱れた寝間着と、頭になった白い肌に目を奪われた。思わず、膳をひっくり返しそうになってしまい、慌てている。

忍海は構わず、大きな欠伸をしてみせた。

「おはよ。そこに、置いておいておくれ」

いつにも増して、外が騒がしく感じる。

女中は、一言だけ告げた。

「つ、辻斬りみたいです。夜は出歩かない方がいいかと存じます」

「物騒だね」

寝ぼけ眼で、物騒だと言いつつも、そういう世の中だから仕方ないとさえ思った。同時に、どうせこの後出て行くのだから、関係無いとも考えていた。

閉め切ったままの雨戸を開けてみれば、真っ暗だった部屋へ一気に太陽の光が差し込んで来る。

嘘のように艶やかな、桜舞う宿場町が、目下に広がっていた。

飴売りが、忍海の居る旅籠前を通り過ぎて行くのが見える。

忍海は朝餉を済ませると、男の姿を身に纏った。男の姿ではあるが、浪士ではなく巫覡ふげきである。けれど、見る人によつては三味線の印象もあつて芸人、もしくは男娼にも見えるであろう。それ程に、艶は隠せていない。勿論、わざとそうしている

のもあるのだが。

腰に下げた刀は無く、代わりに懷刀を忍ばせている。

「世話になったね」

忍海は、金を払って旅籠を出た。

雀色時、次の宿場町が見えてきた。

のんびり出発した割には、順調に思う。暑くなる前に、少しでも涼しい方角に向かつていきたいと考えているだけで、行く先は特にない。

陽が完全に落ち切る前に、空いている旅籠を見つけて、晩酌でも嗜もうかと思っていると、不意に嫌な予感がした。

咄嗟に身を翻せば、鼻先寸前の所に刃が見える。

忍海の被っていた笠が、綺麗に切れた。切り口の隙間から刀の持ち主に視線をやると、無表情の男が、目を見開きながらこちらを見ている。不気味に瞬きする気配

もない。

忍海は、そのまま斬られたフリをして、倒れ込んだ。

この、よく分からない男の隙を見て逃げてやろうと、棒手裏剣をそっと手に隠し出した。

（物盗りだろうか）

しかし、男は忍海を斬ったと信じ切ったのか、踵を返して立ち去った。

忍海の脳裏に、今朝の女中の忠告が過ぎった。

“辻斬りみたいです”

男の姿が見えなくなると、忍海は立ち上がり、砂埃を払った。

まさか辻斬りは、宿場町から散歩でもするかのよう歩いて来たとも言えるだろうか。

だとしても、侍にしては間抜けである。

（手応えも、なかったらうに）

改めて笠の切り口を確認し、ぞっとした。

（手応えを感じない程、斬れ味の良い刀であったなら）

忍海は、今し方背中に感じた寒気を払拭しようと、急ぎ足で宿場町へと向かった。

三軒目で、ようやく部屋を借りられた。

なんせ、我儘な条件があるので、すんなり見つかる事が少ない。

「旅の巫覡しております。数日、宿泊させていただきませんか。狭くても構いませんので、相部屋はご遠慮いただきましたい。それから、湯屋ではなく毎日身体を洗いたいので、何かしらご用意いただけないでしょうか。勤め上、夜分遅くなる事もありますから、裏口から出入りさせて頂けると有難いのです」

忍海の申し出に、例えば部屋が空いていたとしても、大抵の店主は面倒くさそうな顔をする。

だから、忍海はいつも、店側へ小判を一枚先に渡すのだ。

「宿泊代は、旅立つ時に改めて支払いましょう。代金は別途二倍にしてくださいな」

仕上げに、にっこり笑いかけるのだ。これで、断る店はまず無かった。

今朝までは、この宿場町に泊まるのは一晩だけだと決めていた。けれど、先程の異常な男のせいで、気分が萎えてしまった。

この旅籠に少し引き籠り、あの男がこの近くにいない事を見計らってから再び旅立とうと、予定を変える事にした。

（要らぬ出費だな）

先の宿場町から、大して進んでいないのも合わせて気に入らない。

階段を上がり、案内された部屋の窓から外を覗くと、隣に煮売屋のようなものが見える。

お海の姿で行ってみようかと思い、夕餉は断った。

女中が完全に引っ込んだのを見計い、忍海は巫女衣装に着替えると、化粧と紅を引いた。仕上げには、時代遅れの被衣で自分を隠してみせた。旅の若い娘が一人、男から隠れて酒を呑む為の策だと見せる為である。

暫く引き籠ると言っても、長居するつもりは無いのだ。様子によっては、明日にでも旅立ちたい。これは、情報収集も兼ねている。

旅籠の人間に見られないよう、裏口からそっと抜け出した。

隣の煮売屋に入ると、先程までわいわいと煩かった店内が、水を打ったかのように静かになった。

（えらい、別嬪さんが来たもんだ）

誰もがお海に釘付けになり、徳利を落とす者までいた。

その風貌から、お海が神聖な巫女である事が見て取れる。

お海は、奥の席に独り座った。

「柳蔭とねぎま汁をいただけますか」

接客をしていたのは、四十代後半の女将と十代の娘である。親子だろうか。どうやら主人は、奥で料理を作っているようである。

娘は顔を赤くして、ぼんやりお海を見ていた。気付いたお海が娘に笑いかけると、

娘は恥ずかしそうに顔を背け、奥へと小走りに消えていった。

「ああ。もう、あの娘ったら。すみませんねえ、巫女様がお綺麗だから」

「そう、嬉しいわ」

「いっつも美人画見ながら、なんかやってますわ」

お海は、楽しそうに笑って魅せた。お海のあまりの艶つばさに、女将さんすら恥ずかしくなる程である。

となれば、一言でも言葉を交わしてみたいと思うのが男の性である。

「巫女さんに一杯奢らせてくれ」

誰かがそう言う

「ずるいぞ、俺も！」

と、声が聞こえてくる。

「そんなに、呑めませんよ。殿方達は、私をそんなに酔わせたんです？ 助平ね」
それまで、相手にされないと思っていた男達に、お海はわざと涼しげな視線を向

けた。

「好きな物頼んどくれ」

「お言葉に甘えて」

柳蔭が運ばれてきた。お海は両の指先でお猪口を持つと、小鳥のようにちびちびと呑んだ。その姿が、色っぽくて愛らしくて、実に可愛らしい。もっと近くで見たいと、男達が寄ってくる。

（甘い。嫌いじゃないが、地酒が呑みたい）

お海は、そんな事を感じさせずに、美味しそうに呑んでみせるのだ。呑み終わると、少し碎けた表情に変わる。

「地酒もいただけますか？ それから、煮魚と湯豆腐もお願いします」

同じように、運ばれてきたねぎま汁も啜ってみせた。

お海からすれば、これらは全てパフォーマンスなのだ。女芸と言っても、過言では無い。

そして、その場が程良く自分のペースに落ち着いたところで、話しを切り出す。

「もし、ご存知の殿方がおられましたら、教えていただけませんか。聞いたんですよ、辻斬りの噂。先程、旅のお方も襲われそうになったとか」

その場が、ざわついた。誰もが動揺して、顔を見合わせては誰が切り出すか迷っているようだ。

お海は構わず、料理をつついた。味が良い塩梅に好みで、ここの料理が気に入った。

「俺はよ、行商でこの辺りの宿場町を回ってるんだが、辻斬りの話を聞くようになったのは十日程前だったかな。元から侍崩れの浪士がこの辺りには多くてね、よく揉め事は起きてるんだよ。それと同じもんだと思うがね」

「旦那は、恐ろしくないんですかい？」

「そりゃ、怖くないっちゃ嘘になるが。気にしてたら商売なんぞ、出来はせんよ。それに、狙われるのは侍だ」

お海は、運ばれてきた地酒をお猪口に注ぐと、くるくると遊んでから口に含んだ。

（侍ねえ）

曲りなりにも、侍に見えたのであろうか。と、お海が疑問に首を傾げた時だった。

「妖刀村正の呪いだよ」

別の男が声を上げた。

「またあ、どっからそんなインチキな怪談噺を」

別の男が、呆れたように笑って言った。

「最近の浪士はな、幕府に楯突きたいとかで、村正を持つのが流行りなんだよ。格好ばっかだかんな」

お海も、知ってはいる。刀の名称の事を言っているのだ。徳川家を代々死に追いやったという、有名な刀が其れである。今でいう、ブランド名というやつだ。

お海は、心底馬鹿馬鹿しい、呪い等存在するものか、してたまるかと思う。巫覡のくせに。

「お兄さん、どうして其れが村正だと思うの？」

お海が問うと、周りは笑った。

「いいじゃないですか。こんなに楽しい夜なんですもの。怪談噺くらい、皆で聞いてみましょうよ」

お海が蕩けるような顔を向けると、その場は怪談噺を切り出そうとする男に集中した。男は酔いもあってか、ちよつとだけそれっぽく話し始めた。

「あれは、五日程前の晩だったな。俺は、ここでたらふく呑んでからの、家に帰る途中だったわけよ。夜道を歩いていたら、妙な鳴き声が聞こえたんだ。最初は蛙か猫だと思ったんだが、どうにも違う気がしてな。酔った勢いもあって、確認してみるか、声のした方へ行ってみたわけだ。そしたら、侍が倒れていた。俺はビックリして、酔いも冷めちまったよ。思わず悲鳴を上げて逃げようとしたら、その侍が血塗れの顔を上げて、俺にこう言ったんだ。“むゝらゝまゝさあゝ！”だから、村正に斬られたに違いない」

「お兄さん、よく生きていられたわね」

お海が心無く労うと、男は嬉しそうにはにかんだ。

「お前。そりゃ、妖刀村正じゃなくて、村正っちゅう人なんじゃないのか？」

別の男が野次を入れた。

「何を言うか！ 妖刀村正、浪漫よ」

何処まで、本当だか。と、お海は呆れた。

しかし、男達の話からすると、この辻斬りは少なくとも、十日前からうろろしているようだ。

先の宿場町からここの宿場町まで、約三里程である。気軽にうろろする距離でもないと思うのだが。

（辻斬りの意図がよく分からん）

異常者に、意図など求めてはいけないのかもしれないが、このままではここに足止めである。自ら危ない橋を渡りたくもないので、どうにか逃げる方法は無いもの

かと考えていると、面白い話を持っていると、男が声を上げた。

「妖刀村正は知らんが、少し前に妙な侍がおったぞ。何でも十両出すから、男を斬って欲しいのだと」

「なんで、お前さんに、その侍は話したんだ？」

驚く別の男に、この男は答えた。

「盗み聞きだ」

（噂を流すのが目的か）

お海は、この件にはこれ以上関わらない方が得策と考えた。

となれば、やはり安全に、どうしたらこの宿場町から離れられるかである。

（昼間に女の姿が無難か。巫女でもない、町娘にでもなってみるか）

「お兄さん方、次の安全な宿場町まではどのくらい？」

最初の男が答えた。

「そうだな。二つ程超えなきゃならねえから、六里くらいか。一日で行けない距離

ではないが」

（そんなに頑張りたいくも無いのだけど）

と、致し方ないと、お海は箸を置いた。

「ご馳走様。楽しいお話をありがとう。今夜のお代は、お兄さん方に任せてよろしいですね」

しやなり、とお海は煮売屋を出た。

警戒する程の距離も無く旅籠に戻ると、廊下で女中に声を掛けられた。室内の暗さに加えて被衣で隠しているため、巫女姿である事は気付かれていないようである。

「うちに風呂はありませんが、大きい盥に湯を張りましたよ。構いませんかね」

「充分です。手拭いと寝間着を取ってきます」

忍海の声で伝えると、女中は少し安心したように去っていった。

忍海は育てられた境遇から、普通の人間よりも夜目が効く。目隠ししていても、ある程度の状況を把握できるくらいに感覚も鋭い。だから、真つ暗な夜分に雨戸が

閉め切られた室内であっても、相手に何ら違和感を与えさせないのである。

故に、女中も自分は手燭を持っているのに、忍海が何も持っていない事に気付かなかった。

忍海は寝間着と手拭いに加え、米糠の袋を用意した。化粧を丁寧に落とすためである。

真っ暗な部屋を先程と同様、灯りも持たずに真っ直ぐ進み、灯りの見える女中の元へと歩み寄った。

そこは土間であったが、行水するには十分な用意がされていた。

「洗濯用の盥しか用意がなくて」

と、すまなさそうに女中は頭を下げた。

「無理を言っているのは俺の方だ」

「よろしければ、お背中をお流ししましょうか」

忍海は着物を脱ぐと、盥に入った。

手燭の灯す中で、忍海の白い肌は、より一層潤いを増して見える。暗がりの中、絹の様な黒髪が、その肌を更に際立たせているように思えた。女中は、その馨しさに目眩がした。

湯は、少し熱めで、全身が痺れるように気持ちが良い。忍海は、持ってきた米糠の袋で、顔と身体を洗い始めた。

「米糠で洗っているんですね。綺麗な筈だわ」

忍海は、自分である程度洗うと、米糠の袋を女中に渡した。

「背中では自分で出来ないから、助かるよ」

女中に背中を流してもらうと、妙に気分が良い。急いで明日、ここを出なくても良いような気がしてきた。

「お兄さん、疲れているみたいね」

ふと言われてみれば、そうかなと納得した。思えば、この所、簡単に人を斬り過ぎている様にも思う。

「明日は、晴れると思う？」

忍海は、なんとなく女中に聞いてみた。

「そういえば、最近雨が降っていないねえ。春先だし、そろそろ雨の日が多くなりそうもんだけど。あら、少し冷めてきたわね、湯を足そうかい？」

女中の申し出を断り、行水を終えて忍海は部屋に戻った。

部屋の布団の上に腰掛けて、雨戸を少し開けてみる。朧気な寝待月が、顔を覗かせていた。月の光に反射しながら、桜の花弁が時折吹く風に舞っている。

（雨が降ったら、終いだな）

少し肌寒く感じて、湯冷めする前に雨戸を閉め直そうとした。

「あ！」

と、外から男の声が響いて聞こえた。一瞬だったが、忍海の耳には確かに聞こえたのだ。そして、風に乗って生々しい血の臭いが鼻腔を擦った。いつもいつだつて、纏わり付いてくる、あの臭いだ。

忍海は、それとなく目を凝らして外を見張った。

随分先で揺れる柳の木の下で、月に照らされた刃が一瞬きらりと光って見えた。

（辻斬りか。まだ居るのか。さっさと移動してくれないかな）

少しばかりの、溜め息が漏れた。今夜は見ないフリをして、雨戸を閉めて寝た。

翌朝、案の定騒ぎになっていた。

切られた笠を買い直さなければならぬし、女物の着物の調達も必要だったので、

ぶらりと買い物に出たついでに野次馬になった。

昨晩斬られたのは、若い侍のよう。それだけで、佐幕だか倒幕だかまでは分からない。大体、この辺りには脱藩浪士もうろうろしている。ただ、役人が言うには、斬り口からして辻斬りに間違い無いだろうとの事だった。

「お役人、何か証拠はあるのかい？」

忍海は、しれっと聞いてみた。

「証拠と言うか、辻斬りの刀傷はあまりにも斬り口が綺麗なんだよ。こりゃ、斬っ

た方も斬られた方も、気付かないんじゃないかな」

役人は、困っているようだった。

「そりゃ、恐ろしい事だね」

「あんた、なんだい？」

「ただの、旅の巫覡ですよ」

「そうかい、なら仏さんに手でも合わせてくれないか」

忍海は、失笑した。

「そりゃ、あんた。坊主の仕事だよ」

遺体が運ばれていくと、役人もその場から立ち去った。

こんな所は、早々におさらばしたいものだ。と思い、まだまだ明るいうちに忍海は旅籠に戻った。

入口で、旅籠の女将と隣の煮売屋の女将が、話をしていた。女の井戸端会議の方が、煮売屋に集まる男達より、面白い情報を持っていたりするものだ。こそつと聞

き耳を立ててみた。

「また、辻斬りね。昨日は隣の宿場町だったのに」

「私等が、箒で鬩えれば十両儲かるのにね」

女将達は、笑っていた。

（遅しいな）

と、忍海は思う。

「冗談はさておき。さつき妙なお侍が来てね、歩き巫女さんを知らなかった言うんだよ。確かに、昨晩うちには来たんだけどね。泊まってないかい？」

「巫女さんかい？ 巫覡さんなら居るけど、男だよ？」

「なら違うか。そのお侍、何だった？」

「そりゃもう必死でね。口利きして欲しいんだって」

「奥方に逃げられたのかねー」

また、女将達は笑っていた。

忍海は、こそりと裏口から部屋に戻った。

（俺の事を探している侍？ とりあえず、殺しておこう）

余計な事に巻き込まれたくもないし、今後の事も考えて、深入りしようとする人間、特に侍は殺しておく事にしている。

女将達の声が大きいので、井戸端会議は二階の部屋からでも十分に聞こえた。

「今夜、そのお侍がうちに来るって。よっぽど、巫女さんに会いたいよね。あの巫女さん、綺麗だったもの。女の私でも惚れてしまいそうだったわ」

「そんなにかい。私も見てみたいものだねえ」

（あんたは、昨日からずっと見てるよ）

忍海は、ちょっと面白くなっていた。しかし、井戸端会議はそれだけであっさり終わったので、少し残念に思う。

翌早朝、この宿場町を出立する用意を済ませてから、今夜の準備をした。狙うのは煮売屋に来る侍ではあるが、異常者の件もあるので、装備を念入りに決め込んだ。

いつもの巫女衣装を纏い、口元に毒を含んだ紅を引くと、毒藥と媚藥を懷に、更には簪を余分に挿して、棒手裏劍も袴の下に忍ばせた。それから、愛用の懷刀である。

闇討ちであっても、侍相手では分が悪いと考えている。こっちは、ただの巫覡なのだ。と言うのが、忍海の言い分である。

なら、自分から狙いにいかなければいいのだが、余計な面倒を増やさない為の大事な決め事である。金にはならないが。

陽が落ち始めてから、雨戸を少しだけ開けて、外の様子をじっと見ていた。

暫くして、大小腰に携えた侍二人が、偉そうに煮売屋へと入っていった。

（あ！）

忍海は二人に気付き、急いで文を認めた。

化粧をしたままなので、被衣ですっぽり顔を隠すと、一階に降りて従業員を呼んだ。

何事かと、女将が出てきた。

「すまない。隣の煮売屋に、侍が二人来ている筈だ。悪いがこれを、渡して来てくれないか」

女将は自分で渡せばいいのにと思ったが、忍海の顔を隠した異様な姿と、文と共に一匆渡されたので、何も聞かずに受け入れた。

忍海を探していたのは、前の宿場町でお海に口利きを依頼した侍であった。

誘い出してから殺してもいいのだが、“口利きをして欲しい”と聞いては、今一度話を聞いておく手もあるものだ。そして、隣の侍は現場を見届けた男だった。

侍から、四半刻もせずに返事が届けられた。

“今一度、口利きを頼みたい。十両でどうだろうか。”

相手も必死のようである。文には、更に一両が包んであった。

忍海は、返事の文を認めた。信用している訳では無い。

“誠意をお見せください。お二人のお腰の大小を、隣の旅籠の女将にお預けにな

りましたら、巫覡の部屋を尋ねてくださいまし。女将には、私から伝えておきます。」再び忍海は、女将に使いを頼んだ。もし二人の侍が訪ねて来たら、腰の大小を受け取って欲しいと言う旨も伝えた。今度は三匆渡した。

女将は複雑に思いつつも、いい小遣い稼ぎになったと、逆に喜んでいた。ただ一言だけ、忍海に釘を刺した。

「揉め事だけは、やめとくれよ」

「知り合いと、少し話をするだけだよ。来たら、お茶も煎れて欲しい」

まあ、刀は預かるのだから。と、女将は納得したようであった。

少しの間、雨戸の隙間から外の様子を見ていると、侍二人が煮売屋から出て来て、こちらに向かってくる。

下から、二人の侍が腰の大小を預ける声が聞こえてきた。

階段を登ってくるのは三人、侍二人と女将だ。途中で足音が一度止まり、「お茶をお持ちしますから」という女将のかい声が聞こえた。その後、二人の足音は忍

海の部屋の前で止まった。

「お海殿から、こちらに来るようにと申しつかりました」

忍海は、お海として答えた。

「聞いております。どうぞ、中へ」

侍二人が襖を開けると、そこには美しく指先を着いて座る“お海”が居た。

「巫女の口利きがご所望のようで」

後から、お茶を運んできた女将が首を傾げた。

「女将さん、そちらに置いておいてください。殿方でしたら、席を外してくださいましたのよ。また直ぐに戻って来ますから、ご心配なく」

女将にお海は笑いかけたが、女将は腑に落ち無い様子で去っていった。

「知り合いと話すって言つといて。あの巫覡さんは、よく分からないわね」

知り合いと話すのは自分では無かったのか、何時出掛けて、何時この巫女が来たのか。全く分からないと言つた風だった。要するに、同一人物だとは気付いていな

い。

少しばかり滞在するつもりであれば旅籠に説明する事もあるが、この旅籠はさつさと出て行くつもりなので、正体を知られていない方が後々の面倒事が少ないと考えているまでだ。

お海は、侍二人にお茶を出す際に、気付かれないよう毒を混ぜた。じわじわと効いて、一刻程であの世に行ける。念の為の用心である。

「さて、どのような口利きで？」

主軸であろう侍の方が、話を始めた。

「単刀直入に言う。辻斬りを始末してくれ。あれは、妖刀に魅入られてしまって、手に負えん」

「お断りします。お侍でも出来ないのに、巫女の私にどうして出来ると？」

依頼主は、懷から十両出して畳に置いた。

「前金だ。どうしても、斬って欲しい。斬ってくれば、更に十両積もう」

（よし！　よし！）

表情に出しはしないが、お海の気持ちは昂っていた。思わず、拳を作りたくなるくらいに。

「お海殿、鬼の始末は鬼にしか出来ぬのだ」

お海は、その物言いが少し気に入った。思わず目元が緩む。

「では、ここは鬼になりましょう。もう十両。三十両で如何でしょう」

依頼主は懷から更に十両出すと、先程の十両と並べた。お海は、しなやかにそれらを袂に入れた。

「その、辻斬りと言うのは？」

依頼主の言う、斯く斯く然々な話はこうである。

その男は、元々佐幕派であった。しかし、攘夷が無理だと悟ると、あっさり倒幕派へと鞍替えをした。佐幕から倒幕への誠意を見せるため、男は村正の刀を手に入れた、帯刀し始める。と、男は急に一変した。

倒幕派と言いながら、村正を帯刀しながらも、その刀で倒幕派を斬り始めたのだ。そして、異人をも襲い始めた。

佐幕に戻る気があるのならと、手を差し伸べた仲間もいたが、せめて村正は手放せと説得したらしい。が、今度は説得した者を次々と斬り伏せた。もはや、何がしたいのか分からない。

「この辺りで開国、異人、の言葉を聞くと、その場所に現れるのだ。先の宿場町では、お海殿が先に口利きしてしまったが、あの場所に来る筈だった残党の男が斬られた」

お海に、嫌な考えが浮かんだ。

「もしや、私が倒幕の手先だと思われてはしませんかね」

「いかにも」

お海は、呼吸が止まるかと思った。

狙われているのは、どうやら自分のようである。他の仏は、ついであつたのかも

しれない。と思うと、それはそれで否定したくもなる。

「昨晩は、殿方の、旅芸人が襲われたそうですよ。何かの間違えではございませんか？」

依頼主は答えた。

「下手人は、お海殿の仕込み三味線を見ているのだ。三味線が目に入れば、誰だつて斬るだろう。そういう男なのだ、今は」

そして、依頼主は何かを続けようとして濁した。

「隠し事がお有りでしたら、私はこの場でお二人を斬り伏せて逃げましょうか」

お海の冷たい目が、侍達を交互に見た。余計な事に巻き込みやがって、と言う怒りすら籠っている。二人の侍は、背筋が凍り付いた。

侍二人は茶を飲んで落ち着くと、一呼吸してから白状した。

「拙者達も、狙われているのだ」

それで、三十両か。と、お海はようやく納得した。

仕込み三味線は、大事な商売道具である。こう見えても、仕込まれた刀剣は先祖代々の名刀なのだ。一族を出る時、これまでの恨みも辛みも散々込めて、長老である大婆を串刺しにしてまで搔っ払って来た代物であるのだから、そう易々と手放す訳にはいかない。

「その殿方は、三十両で承りましょう。ただ、私は単なる巫女にございます故、お侍様の手助けなくては、この口利きは不可能でございますよ」

「あい、分かった」

と、依頼主は頷いた。

「そうですねえ、明日の暮れ六つ頃。隣の煮売屋で、ご馳走して下さいな」

先程からずっと押し黙ったままの侍は、（まだ集めるのか）と内心思ったが、先日の殺人現場を目撃してしまつては、何も言えなかった。あと、どの辺が単なる巫女なのか、聞いてみたいと思つていた。

「承知。では、拙者達はこれで」

「お待ちください」

立ち上がり、去ろうとした侍二人を、お海は引き止めた。

「口利きらしい事を、させてくださいな」

お海は、袂から薬包を二つ取り出した。

「お侍様。死相が出ていますから、なるべく早めにお飲みになってくださいな」

侍二人は、それぞれ薬包を受け取りながらも訝しんだ。そこに、お海はにっこり告げた。

「私は、貴方々が死のうが生きようが構いやしませんよ。ただ、残りの十両の為だと思ってくださいな。それでも信用出来ないなら、こうしてはどうです？ どちらかが飲まず、どちらかがお飲みになって。私は生き残った方から、十両いただきますよ」

薬包は、茶に混ぜて飲ませた猛毒の解毒剤である。ビビり散らした侍で、もう少し遊ぶのも面白いと、お海は判断したのだ。

帰り際、侍二人は菓を飲んで帰った。

（情けないねえ）

自分の事を棚に上げるのは、当たり前である。お海は、声を殺しながら笑い転じた。

翌日。暮れ六つ頃になると、約束通り侍二人が煮売屋にやって来た。

お海は旅籠の窓から其れを見届けると、被衣で姿を隠しながら旅籠を出た。何食わぬ顔で煮売屋に入ると、食事の注文を始めた。

「お酒と、そうねえ。焼き鳥はあるかしら？」

お海は、依頼主の隣にしなりと座った。

「焼き鳥あるよ！ 巫女様が食べていいのかい？」

お海は、艶やかに笑った。

「大好物ですよ」

お海が鬼と言えども、依頼主の目には絶世の美女にしか見えない。美しい花には毒が有る等とは、よく言つたものだと感じする。お海がグイッと身体を寄せるので、己の羞恥が浮き立ちそうで、律する為に咳払いをした。

「葉包は、効きましたか？」

「ああ、あれから何ともなかった。それより、事の前に酒など大丈夫か？」

辻斬りを斬りに行く、等とは言えないので、依頼主はぼかして尋ねた。

丁度、娘が酒の入った酒器を運んできた。

「こんな刻から、人前で。嫌だわ。助平」

娘の顔が、真っ赤に染まった。

「そんな、誤解を招く様な事を」

依頼主も顔を赤らめて、否定した。

あまり自尊心の高い生物をからかうのも面倒なので、お海はどうぞと依頼主のお猪口に酒を注いでやった。お付きの侍にも勧めたが、彼は丁重に断ってきた。

「もう少し酔いましたら、蕎麦を食べに連れて行ってください。その頃には、暗くて夜道が恐ろしゅうございます。お侍様、旅籠まで送ってくださいませね」

お海の長い睫毛から、甘える様な視線が依頼主を釘付けにした。

「勿論」

お付きの侍は、それがお海からの合図だと汲んだ。

あの、美しくも恐ろしい現場を目の当たりにした後なのだ。どれだけ美しくあろうとも、それは鬼だから為せる業としか思えない。その美しさすら、背筋が凍り、身震いする程なのである。

（ああ、先生は。尊敬するこの先生ですら、鬼に喰われようとしている）

そう思った。それに気付いたのか、お海が声を掛けた。

「あら、寒いのかしら？ 熱燗ならどう？」

見透かされた様なその声に、侍は背中をびくりと振るわせた。

「いや、結構。もし、酔い潰れでもしたら、私が介抱致します故。お気になさらず」

「そう。ありがとう」

（こいつ、金玉袋まで縮こまってやんの）

と思ひながら、お海は満面の笑みを贈ってあげた。侍の命を、ぎりぎりで弄ぶのは面白いなと楽しんでいるのだ。この侍二人は、まだまだ利用価値がありそうだ。金もたんまり持っているを見た。

（俺の名を聞く度に、小便垂れ流すくらい脅かしておいてやるか）

後の明治に入れば、この二人も政界で活躍する事になるのだが、それはまた別のお話。

お海は依頼主の金で散々飲み食いすると、ぎりぎり連れて歩ける生酔い侍と、亥の刻頃に夜鷹蕎麦へ向かった。風に乗って、季節外れの風鈴の音が響いてくる。ふわりと、まだ花卉と共に桜の優しい香りも流れてきた。少し後ろを、お付きの侍が緊張した足取りで着いてきている。

「お海殿。本当に、お主は美しいなあ。吉原太夫でも、お主には適わんよ」

生酔い侍は、支えるお海に甘える様に、時折お海の頬に顔を近付けてはめろめろになつてゐる。

「あら、吉原にはよく行かれるのですか？」

「馴染みの遊女がおるが、お主の足元にも及ばぬな」

「嫌だわ、妬いちゃう」

お海は心にも無い言葉を囁くも、内心はその金だけ寄越せよ、と思つていた。

ぽつんと蕎麦屋が見えた。

お海は、誰にも分からないよう、軽い肘鉄を生酔い侍の腹に入れた。入れられた生酔い侍は、思わず嘔吐いた。

この物語はフィクションです。

登場人物・団体・名称等は架空であり、実在のもの
とは関係ありません。

掲載内容（絵、文章等）一部及び全てについて、無断複製、転載、転用、改変等の二次利用を固く禁じます。上記著作権の無断複製、転載、転用、改変等が判明した場合、法的処置をとる場合がございます。

くらま しおん
鞍馬 榊音

2001年商業デビュー。佳作、奨励賞受賞。

2014年～2019年商業サイトにて週2回連載。

かきすけ きんしろう
柿助 錦糸郎

商業漫画雑誌にて複数回掲載。

各配信サイトにて漫画“からくり治療院”連載中。

妖言 およづれごと

－いろは編－

伊ノ巻

2025年5月25日 初版発行

著者 鞍馬 櫛音

絵 柿助 錦糸郎

